

## トポス 対話的場所モデル

### ——多様な場所と時間をむすぶクロノトポス・モデル

やまだようこ 京都大学大学院教育学研究科

Yoko Yamada Graduate School of Education, Kyoto University

山田千積 京都大学大学院医学研究科

Chizumi Yamada Graduate School of Medicine, Kyoto University

#### 要約

質的研究の課題は、ローカルで一時的という「現場」の特徴を重視しながら、複数の「現場」に共通する一般化可能な「知」をどのように生成するかにある。本論では、「場所」モデルを基本にして、ナラティブと多声的対話概念を関連づけた多様なモデル構成によって、その課題に応えようとする。「場所」モデルは、自己や他者を「個人」という独立概念ではなく、「場所」に埋め込まれた文脈依存的概念で考えるところに特徴がある。「ナラティブ場所」対話モデルは、場所に含まれる人間の相互行為に着目するもので、1) 入れ子モデル、2) 二者対話モデル、3) 三者対話モデル、4) 多声対話モデルの4種類を提示する。「異場所と異時間」対話モデルは、文化的文脈と歴史的・時間的変化の両方を視野に入れるもので、5) 場所間対話モデル、6) 人生の年輪モデル、7) クロノトポス・モデルの3種類を提示する。これらのモデルは次のような特徴をもつ。理論枠組を単純化することによって、ローカルな現場の多様な現実にあわせて具象化しやすくなる。複数のモデルを使うことで、研究目的に応じて多種のモデルを組み合わせたことができる。モデル間を有機的に関係づけることによって、モデルの生成的変形を発展させることができる。

#### キーワード

対話、生成的モデル、場所、インターローカリティ、クロノトポス

#### Title

**Dialogical Topos Models: Crono-Topos Model with Generative Diversity and Inter-locality**

#### Abstract

Qualitative studies are characterized by locality and difficulty of replication, and it is a crucial issue how to generate a common "knowledge" which is generalized across several "fields". Model construction is one way to resolve this issue. Here, we try to propose the diverse models related with narrative and polyphonic dialogue, based on "Topos Model", where self and others are considered as context-dependent concepts included in "topos" rather than independent concepts as "individuals". The models of "narrative topos" focus on the patterns of persons' interaction, which include four models; 1) Ireko (Nest of boxes) Model, 2) Dual Dialogical Model, 3) Triple Dialogical Model, and 4) Polyphonic Dialogical Model. The models of "different topos and times" concentrate on the difference in the cultural and temporal contexts, which include three models; 5) Inter-topos Dialogical Model, 6) Life Rings Model, and 7) Crono-topos Model. Our models have the following advantages; by simplification of theoretical frames, we can apply these models to a number of realities of local fields. By using multiple models, we can combine them to the research purposes. By organizing the mutual relationship of the models, we can develop the generative variations.

#### Key words

dialogue, generative model, topos, inter-locality, crono-topos

## はじめに

現場<sup>フィールド</sup>研究と質的研究は、抽象的で単一の普遍性 (universality) を求めてきた従来の学問に対して、ローカリティ (locality) と多様性 (diversity) を重視する (Geertz, 1991/1983)。別のことばで言えば、文脈性や特殊性や少数事例を大切にするといいてもよいだろう (Denzin & Lincoln, 2003; Flick, 2002/1995 など)。

質的研究は「非科学的」と批判されることがある。それは科学的方法とはどうあるべきかについての見解の相違によるところが大きい (Allport, 1970/1942)。科学の基本要件のひとつは、新しい知を一般化可能性 (generalization) あるいは再現可能性 (replication) をもつ形式で提出することであろう。実験的研究では、条件を同じにすれば、いつ誰がやっても同じ結果が「反復」可能であるという意味での再現可能性をめざしている。調査的研究では、母集団から抽出されたサンプルの「代表」値が統計的推量によって一般化可能性をもつことをめざしている。

質的研究は、既成の科学の論理とは異なる論理に拠る。しかし、偶然性や特殊性や一回性や恣意性を超えて、何らかのかたちで一般化し再現可能な知にする方法は必要である。統計的代表値 (平均値や最頻値) や多数決など数の論理によらないで、どのようにしたら「他者」にも通じる意味ある知を提供できるだろうか。

たとえば、フィールドに出かけて身近な少数の人にインタビューしても、偶然に出会った雑多な事例の集積にしかならない場合もあるだろう。また、常識の域を超えられず、既存の知の再生産にしかならないこともある。一見すると具体的な現場事例に基づき、生き生きした記述がされているように見えても、結局は既成の理論や概念を具体的な事例にあてはめて解釈するだけに終わってしまう場合もある。ローカルな「私」の視点にこだわった身辺雑記の私小説や日記は、質的記述ではあるが、それだけでは質的研究とはいえない。学問の知と切り結んで新たな知を生産するためには、何らかの方法で「私」を超えたインターローカルな知を提示する必要があるだろう。

ローカルで多様、一回的で再現性をもちにくい

現場<sup>フィールド</sup>の特徴を重視しながらも、それらをいくつかの現場<sup>フィールド</sup>に共通するようにひらき、より一般化可能なかたちで、新しい知を生み出していくには、どうしたらよいだろうか。

その課題に応えるために、やまだ (1986) は現場データをモデル化していくことの重要性を考え、「モデル構成的現場<sup>フィールド</sup>心理学の方法論」を提案してきた。見田 (1965) は、少数事例におけるデータの恣意性批判に応じて、サンプルの代表性は、目的によって基準が異なることを明確にした。数量的調査の場合には母集団と近似した平均的代表性をとるが、質的研究では「類型のカバレッジ」「次元のカバレッジ」「要因の顕現性」など質的典型性をとる。これは、グレイザーとストラウス (Glaser & Strauss, 1996/1967) の理論的サンプリングに通じる重要な考え方であるが、質的典型性とは何かという問いに応えない限り、単なる類型論やトートロジーに陥る危険がある。やまだ (1986, 2002) は、「モデル構成」という考え方によって、質的データと質的モデルを区別し、その問いに応えようとした。現場データから帰納的に代表させた「典型性」を結論にするのではなく、「典型性」を仮説演繹的に理論化したモデルを示して、現場データと往還しながらモデルもデータも精緻化していく方法である。なお「モデル構成」は、質的研究の唯一の道ではないことに注意が必要である。やまだ (1986) が全体枠組を示したように、「研究目的」「研究対象の取り扱い方」「研究場の特徴」「データ収集の方法」を連関させることが最も重要である。モデル構成は、多様な研究方法論の一つの方向にすぎない。

モデル (model) とは、本論において「現象を相互に関連づけ包括的にまとめたイメージを示すと共に、そのイメージによって新たな知活動を生成していくシステム」と定義する。

モデルには、「原型」「標準」「典型」「模型」「雛型」「見本」「手本」「やり方」「様式」「スタイル」など多様な意味がある。また、モード (mode: 様態, やり方, 形態, 方式), モールド (mold: 型枠, 鋳型), モジュール (module: 構成単位, 交換・組合せ可能な構成部位, 基準) などと関連する。

理論ではなくモデルという用語を用いるのは、多様な目的, 種類, 水準を含むことができるからである。

グレイザーとストラウスが示した概念化による「理論」だけではなく、方法的なもの、見本的なもの、現物的なものも含めて、モデル化が可能である。ここでは、理論枠組や原理を示すものを「理論モデル」、理論枠組を現実化、具体化して示すものを「具象モデル」、理論モデル」と「具象モデル」の間にあるものを「半具象モデル」、実例や見本を例示するものを「事例モデル」と呼んでいる（やまだ、2002）。

その他にも、類型や典型を示す「類型モデル」、やり方や手本を示す「方式モデル」、製品の型やスタイルを示す「様式モデル」、絵や小説や絵画のモデルのように作品の材料となる「素材モデル」、ファッション・モデルや車のモデル展示のような「展示モデル」、天体模型や建築模型や地図のように大きなものを縮小する「模型モデル」など、モデルには多様な形式<sup>フォーム</sup>と機能がありうる。

モデル構成的現場心理学では、一事例を例示する場合でも、「事例モデル」として扱う。たとえ一事例であっても、ランダム・サンプリングで無作為に選ばれる「一サンプル」とは異なる。また、均質な標本の一部という意味での「一切片」とも異なる。平均値や最頻値など数量的「代表値」とは異なる基準で、「代表例」（representative：代理人、代弁者、表現者、代表、見本、型）が事例として選ばれる。事例は、偶然に出会った「事実」の一切片ではなく、現場から選んだ「モデル」である。事例モデルは、「松田聖子」など実在の人物である場合もあるが、研究目的に照らして何を例示するために選んだのか、なぜこの例が適切なのか、モデルとして代表させる理由など、「一般化可能性」「再現可能性」を自覚して記述することになるだろう。

「モデル構成的<sup>フィールド</sup>現場心理学の方法論」は、最近「対話的モデル生成法」に名称を変えた（やまだ、2008a）。基本的な発想は同じであるが、「対話」と「生成」という多様性と変化プロセスを生み出していく動的概念を中核にし、現場心理学を超えてより広い範囲のテキストを扱う「質的研究の方法論」として再構成したのである。したがって、以下では、過去の方法論やその実践例も含めて、「対話的モデル生成法」という名称で統合する。

対話的モデル生成法は、複数の現場<sup>フィールド</sup>の特殊性を生

かしながら、いかにして共通性を見出し、他の現場にも応用可能なことばで一般化していくかという試みである。この方法で生成されるモデルは、次の特徴をもつ。

第1に、生成されるモデルは、あらゆる場面に適用可能な、普遍的、一般的モデルではなく、限定された領域で限定された目的のために構成されるということである（やまだ、1987）。モデルは、ひとつで十分というわけではなく、研究目的によって多種のモデルが必要になる。モデルを地図にたとえるならば、世界を表す地図は多種必要で、歩いて山登りするための地図と航海や飛行のための地図は異なり、移動距離や移動方法によって必要な精度も異なる。したがって、モデルは多種のヴァリエーションや変異形も含めて提示することが重要である。

第2に、生成されるモデルは、堅固な概念構造で構築される完璧な構築物のようなモデルではなく、参画者の修正や追加や省略などの生成し直しを促しやすい、柔軟なネットワークモデルである（やまだ、1987、2008a）。モデル自体が「生きもの」のように現場や研究者に合わせて適応的に変化し、必要に応じて変形し、発達していく。したがって、モデルは生成プロセスやその変遷プロセスを含めて提示することが重要である。ただし、一方向的な発達・発展・進歩プロセスとしてではなく、どのような観点からどこに焦点をあてると、どのような形式のモデルになるのか、その特徴をより良く理解するためである。

第3に、生成されるモデルは、モデルが生み出すイメージによって、新たな知活動を生成していく、それ自体が生きもののようなモデルである。数学モデルのように、人間の常識を超え、見たことも聞いたこともない次元まで扱えるように、新しい知を生み出していく演繹的モデルの役割は重要である。質的モデルにおいても、言語ゲームやイメージ変換によって、常識を超える知の生成、実験的な新しいナラティブの生成とそのルールの追究が可能だろう（やまだ、2008b）。

第4に、生成されるモデルは、その基にある現場データと対話するだけではなく、多種のモデル相互間で対話する。モデル相互をつきあわせて対話することによって、元のモデルが修正されたり、それらに関係づけたりするメタ・モデルが生成される。モデルとモデ

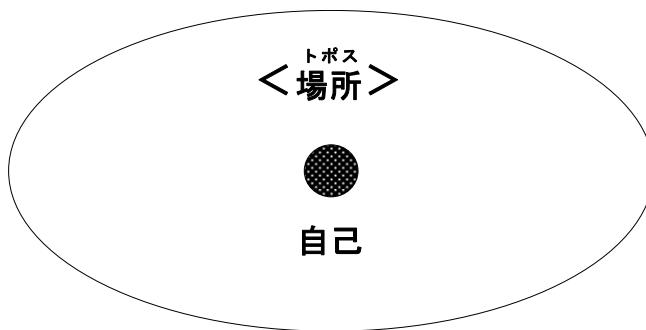


図1 入れ子モデル  
トボス  
場所のなかの自己

ルとを、どのように関係づけるか、モデル相互間の関係づけを提示し、メタ化して調整し、理論化していく作業が重要になる。

本研究では、おもに第4の特徴を中心に「モデル間の相互関係づけ」を試みる。やまだが過去25年間に、異なる研究目的のために生成してきた多様なモデルを、「対話的場所モデル」という観点からまとめて、省察的に再構成し理論的説明を試みる。それと共に、多様なモデル相互の関連づけを行い、さらに発展させた新しいモデル生成を行う。

ここで提示するモデルは、「対話的場所モデル」という観点からまとめたもので、「自己と他者の位置」「ナラティヴ（語り・物語）が生成される場所」「複数の場所と時間をむすぶ」ことを主眼にしたモデル群である。

モデルは、大きく2つのタイプに分けて説明する。第1のタイプは、「ナラティヴ場所」の対話モデルで、ナラティヴが生成される場所の構成員と関係性に着目したモデルである。このタイプのモデルとして、1) 入れ子モデル、2) 二者対話モデル、3) 三者対話モデル、4) 多声対話モデルを提示する。

第2のタイプは、「異場所と異時間」の対話モデルである。このタイプは、異文化や異現場による場所の相違や、歴史的・時間的変化の相違に着目したモデルで、5) 異場所の対話モデル、6) 人生の年輪モデル、7) クロノトボス・モデルを提示する。

## 第1部 「ナラティヴ場所」の対話モデル

### 1 入れ子モデル—場所のなかの自己

本研究のすべてのモデルは、「場所」概念を基底にした図1の「入れ子モデル」から生成されている。図1は、もっとも単純な基本形であり、やまだ(1988)の「私をつつむ母なるもの」の基本構図を一般化して再構成したモデルである。

やまだ(1987, 1988)は、ものの見方の基底となる概念を「個人」ではなく「場所」においた。そして「自己」を個人としてではなく、「場所」のなかに「位置づける」(positioning) ことによって定義してきた。これは、心理学の前提となってきた、ものの見方の大きな変革だと考えられる。

ホワイトヘッド(Whitehead, 1981/1925)によれば、ギリシア哲学以来、自然科学を貫いてきた根底思想は、「個物の局在化」(simple location) という概念である。個物の局在化とは、ものがここにあるという陳述が、ほかのものと本質的な連関をもたず、「個物」として独立に存在するという概念である。

心理学においても、人間を表象するもっとも基底となる概念を「個人(individual)」においてきた。個人とは、アトム(原子)と同語源で、「これ以上分割できない究極の物質」という意味である。「自己

(self)」という概念も、「個人」概念が基になっている(やまだ, 2006)。

個物の局在化という概念は、次の2つの概念とセットになっていた。そのなかで個物(物質)が動く空っぽの「空間(space)」概念と、観察者の位置には無関係に永遠に同じ測度で時を刻む「時間(time)」概念である。

「空間」とは、文字通り空っぽの場所、空虚な器のようなものであり、個人はその中を自由に動き回ることができると考えられてきた。空間は、具体的な内実や中身や意味をもたない虚ろで等質な抽象的枠組のようなものである。

「場所」は、空間とは異なる概念である。ギリシア語のトポス(topos)は、ラテン語ではロクス(locus)、英語のローカス(locus, 場所, 位置, 所在地, 活動の中心)にあたる。ローカル(local), ローケイト(locate, 置く, 位置を示す), ロケーション(location, 居所, 居住地, 活動場所)なども近縁である。ローカルとは、日本で誤解されているように「都会」に対する「田舎」という意味ではなく、「場所に位置する」「地元の」という意味である。英語ではプレイス(place)やポジション(position)も似た意味をもつ。場所は、私たち自身や事物がそこにある場、そこで出来事が起こる場である。

中村(1989)によれば、プラトンは「すべての存在するものはなんらかの場所(トポス)の中にあり、なんらかの場(コーラー)を占めていなければならない」と述べ、アリストテレスは場所を「自分を直接包み込んでいるもの」と考えていた。また、言語についてのトポスとは、人間の知的・言語的な遺産としての、ある主題についての考え方・言い表し方の集積所(貯蔵庫)であったから、愛のトポス、正義のトポスなどというものもあった。話題を意味する英語のトピックも、トポスに由来する。

生態学的視覚理論を提出した心理学者ギブソン(Gibson, 1985/1979)は、人間を含む動物が知覚できるのは空間ではなく場所であり、動物は空虚な空間ではなく場所のなかに生息すると、次のように述べている。

対象が空間を満たす(fill)のではない。なぜな

らば、初めから空虚な空間などありはしないからである。環境の中で変わることなく安定している面が、現実の枠組になる。世界は決して空虚ではない。媒質(medium)に関していえば、そこは運動や移動が起こる領域であり、光が反射し、面が照明を受けるところである。これは占められる場所(room)とでもよばれるもので、空間(space)ではない。面とそれが作りだす配置は知覚されるが……空間が知覚されることはない。(ギブソン, 1985, p.109)

場所(place)は空間の点と対照される環境内の位置であり、多かれ少なかれ広がりのある面ないしは配置である。点は座標軸系に関して位置づけられねばならないが、場所は大きな場所の中に含まれている状態で位置づけられる(たとえば、グレート・プレーンズの川の屈曲部のそばの小屋の中の暖炉というような場合である)。場所はそれに名づけることができるが、はっきりした境界をもつ必要はない。動物の生息場所は場所ですべている。(同, p.37)

迷路の通路、住宅の部屋、街の通り、田舎の溪谷は、それぞれ1つの場所を構成し、1つの場所は1つの景色(vista)、半ば囲った所、一群の現れた面を構成する。「ここ」が点ではなく広がりをもつ領域だという但し書きつきで、景色はここから見えるものである。(同, p.213)

以上から、場所<sup>トポス</sup>の特徴は以下のようにまとめられる。空間は独立した空っぽの枠組であるが、場所はそのところとの関係概念である。空間の座標軸ではものの位置は点で示されるが、場所は、点ではなく広がりのある面と配置からなり、見通し(vista)、半ば囲われた所、一群の面などで構成される。場所は、人やものの運動や移動や出来事が起こる領域であり、それらが起こる時間プロセスや見通し(回想や展望)時間を含む。場所は、人やものを関係づける基盤であり、意味・価値・文化を生成し集積する所である。場所は、名づけることができるが、はっきりした境界をもつ必要はない。

たとえば日本語の「ここ」は、自己の居場所と関係して定義されるので、「場所」<sup>トポス</sup>概念である。「ここ」と

言うときには、単に位置的場所だけではなく、「今」という時間概念も含んでいる。同じモノでも、自己に近い場所であれば「これ」、自己から遠い場所であれば「あれ」と言う。日本語では、人称も場所概念である「コソアド」の体系とむすびについている。同じ人でも「この人」「こいつ」（近い人）になったり、「あの人」「あいつ」（遠い人）になったりする。

ふるさと、家、部屋、地上、川、橋、道、交差点、階段など、私たちが日常的に生活し移動し見通しているのは「場所」である。それは、私たちとむすびついて濃密に意味が集積した場所であり、何もない空虚で等質な「空間」ではない。質的心理学において、日常生活や人生で起こる出来事を記述する基本用語としては、「空間」よりも、「場所」概念のほうが適していると考えられる。

図1の入れ子モデルでは、「自己」は、単独で独立しうる個人としてではなく、場所のなかに位置づけられる中身として定義される。ある意味で自己も場所の一つであり、人間も場所だといえる。場所も中身も、箱の中に小箱があり、小箱の中にはさらに小箱がある入れ子の箱のように、内が外になり、外が内になって、次々に小さくも大きくもなっていく幾重もの包含関係にある。したがって、個人（individual=これ以上分割できないもの）として「自己」を想定するモデルや、内（人間）と外（環境）が切り分けられた「人間-環境」モデルとは大きく異なることに注意されたい。場所は、より大きな場所のなかに含まれ、その場所はさらに大きな場所に含まれるという幾重もの包含関係構造、つまり入れ子（nesting）構造をもつ（やまだ、1988）。図1ではもっとも単純な形で提示している。

場所は、そこで出来事が生じる場であるから、関係の網目（network）や文脈（context）が含まれる。網目や文脈を強調するときには、場所に網目模様や肌理を書き込む場合もある。場所は網目構造をもつ。しかし、場所は、網目や文脈や関係性には解消されないと考えられる。それは、ともに関係性を重視しながら、関係性モデルと場所モデルを分かち大きなポイントである。関係性モデルとしては、たとえば間主観性を重視した「あいだ」概念（木村、1988）や間人主義（濱口、1993）などが、日本文化から発信されてきた。最近では、個人モデルが主流であった欧米でも関係性

が重視されるようになった。それらの多くは、人と人のあいだや出会いや人間関係を重視し、人間の相互主体性を基盤としており、基本的に「人間中心モデル」である。

しかし、場所モデルは、人間よりも、場所を基盤としたモデルである。場所との関係は、人と人が一時的な出会いで自由に主体的に創り出せる関係性や、ア・ウンの呼吸で動くその場の雰囲気や即興的に動く現時的な関係性に解消できない。場所は、人間の行為を規定する「居場所」「地面」「風景」「風土」「気候」「生態系」をつくっており、人間と相互関係するが、人間の主体性によって簡単に動かせるものではないし自覚しにくい。場所は、長い歴史によって形づくられた「文化」「風土」「場所の力（ゲニウス・ロキ）」とかかわっている。場所モデルには、人間との関係性が不可分ではあるが、基盤となるのは、人間の論理よりも場所の論理なのである。したがって、以下のモデルでは、人と人とのあいだを行き交う「相互行為」や「語りや物語」としてのナラティブだけではなく、ナラティブが共同生成される「場所」を重視している。

## 2 二者対話モデル-自己と他者のナラティブ場所

図2の「二者対話モデル」は、やまだ（2000）の「物語と語りの共同行為」を単純化して再構成した図である。「語りの相互行為モデル」と呼んでもよいだろう。

図2のように、このモデルでは、自己と他者に分裂する。自己は基底となる居場所「ここ」に位置し、他者は「自己から離れた場所」に位置する。自己と他者は、場所の中の「位置」と「距離化」によって定義される。

図2では、自己が単一のものではなく、自己と他者の二者に分離して相互作用する図式を示している。個人としての自己を基盤とし、自己の単一性と連続性と永遠性を強調する自己同一性概念に対して、対話理論は自己の差異化と分裂性と生成変化を重視することになる（やまだ、2008a）。

2つに分かれて隔たった二者は、典型的には「自己」と「他者」と呼ばれ、ナラティブ行為においては「語り手」と「聞き手」と呼ばれる。これらの名前は、

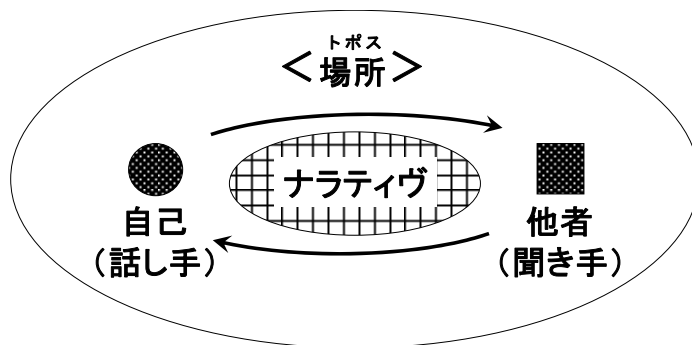


図2 二者対話モデル

自己と他者のナラティブ<sup>トボス</sup>場所

位置 (position) の違いによって交代可能である。自己の位置から見れば「他者」であるものが、その「他者」の位置に立てば、「自己」と呼ばれる。その意味において、二者は自己と他者に分裂し、距離が離れているが、両者の「差異化」は必ずしも行われるわけではなく、交代可能、ターン・テイキングするものとして、同じ場所<sup>トボス</sup>に所属する。

対話 (dialogue) は、原理的に di- (2つに離れた) logue (ことば) であるから、自他が分かれたこの二者関係モデルにおいて、はじめて対話が成立する。そして両者の相互行為によって、ナラティブ (語り・物語) の場所<sup>トボス</sup>が成立する。場所は、もともと話題 (topic) と同語源であるが、ナラティブの相互行為は、そこでナラティブという出来事 (event) が生起する場となるから、ある種の場所<sup>トボス</sup>として理論化される。

図2では、自己と他者は同じ場所に位置し、互いの距離が離れている図式化である。自己と他者の各々が位置する場所自体が遠く隔たり、2つの場所が分裂していることを強調すると、図2は図5へと生成的に変形される。図2と図5は、どちらも自己と他者の対話関係を表す基本図式になる。どちらの図式を用いるかは、研究の問いや焦点化のしかたによって分かれる。

3 三者対話モデル—媒介者 (mediator) を含むナラティブ<sup>トボス</sup>場所

二者の対話モデルは、従来から考えられてきた対話

の基本形である。それに対し、図3のような「三者対話モデル」の重要性は、まだ十分に理論化されていない。これは、やまだ (2007) が「協働の学びのトライアングル・モデル」と名づけたモデルを再構成したものである。

三者対話モデルは、単に二者から三者へと構成員の数がを増えることを意味するのではない。媒介者 (mediator や media) を含む三者関係による対話が生起することが重要である。したがって、このモデルは、単純な「自己」「他者」モデルの延長ではなく、あるいは「一人称」と「二人称」に、「三人称」を加える人称モデルでもない。「媒介者」の役割を重視したモデルだからである。

なお、対話 (dialogue) という概念は、本来は「2つに分離する」という意味を含むので、ポリローグ (polylogue) という用語にしたほうが良いという議論 (Kristeva, 1999/1977) がある。しかし、この新語を一般化して使える段階にはまだないので、ここでは三者以上の関係にも、従来のように対話ということばを拡張して使用する。

図3のような三者対話モデルになると、二者対話モデルとは異なる根本的な変化が起こる。単に対話者の「位置 (position)」だけではなく、「役割 (role)」が重要になるからである。したがって、このナラティブ場所<sup>トボス</sup>に参加する人々は、異なる役割をもって、それぞれが場所<sup>トボス</sup>に関与するモデルになる。

図3で示したように、このモデルの典型的な役割の

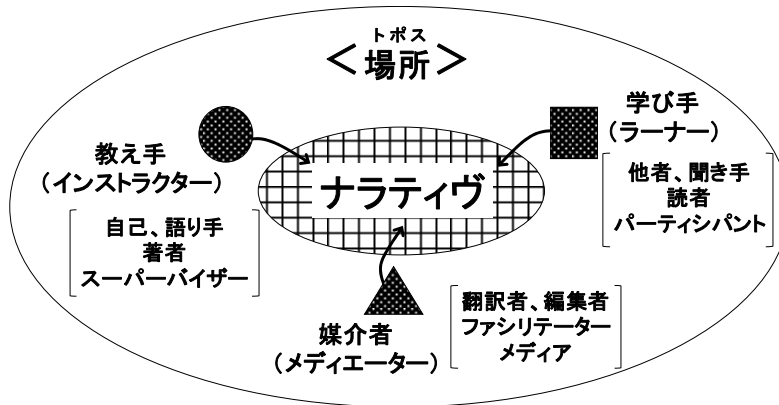


図3 三者対話モデル

媒介者(メディエーター)をふくむナラティブ場所<sup>トボス</sup>

名前を、「教え手（インストラクター）」と「学び手（ラーナー）」と「媒介者（メディエーター）」にした。「協働の学びのトライアングル・モデル」がベースになったからという理由もあるが、それだけではなく、このモデルは非対称的な関係性と役割の相違があるときに、特に有効なモデルだから、この名称がふさわしいと考えられる。このモデルは、教師－生徒、親－子、当事者－非当事者、作者－読者、演技者－観客など、相互行為は行われるが、必ずしも位置交替が可能ではなく、対等な関係ではないときに有効であろう。

このモデルの構成員を、より一般的名称にすれば、「自己」「他者」「媒介者」と呼ぶこともできる。他に、「語り手」「聞き手」「翻訳者」、「著者」「読者」「編集者」、「スーパーバイザー」「パーティシパント」「ファシリテーター」など、別の名前にすることも可能である。

このモデルで重要なのは、「媒介者」の役割である。媒介者としての翻訳者は、異なる言語を別の言語に「うつす（移す・写す）」だけではなく、教え手の立場と学び手の立場のどちらの立場もよく理解して、学び手にとって、より易しくわかりやすいことばに直して説明する役割をする。また、意味の言い換えや価値のズレをつくりだす生成的な役割をする。

たとえば媒介者としての編集者は、雑多な情報を選択し整理して組織化することによって、情報を料理し

て食べやすく提供する料理人である。私たちは現場に出かけて生の食べ物を直接地面から掘って食べているのではなく、多くの流通媒介や料理の加工媒体を通して口にしていく。同様に、ナラティブの場所<sup>トボス</sup>において、生のことばを対話させているようにみえても、そこには多くの媒介者が含まれているはずである。

三者対話モデルは、媒介者に注目したモデルである。媒介者は、人間でなくても「媒体（media）」でもよい。媒体（media）には、培養基や巫女や霊媒という意味もあるように、単なる中継地点ではなく、そこでものごとが養われて育てられ、生きた身体を介してことばが現実化されて伝わるという役割をもつ。

三者対話モデルでは、図3のように二者関係における相互のやりとりの矢印ではなく、各人がそれぞれの立場からナラティブ場所<sup>トボス</sup>に向かって働きかける矢印で表され、協働でナラティブ場所をつくる。

このモデルは、協働の学び教育に適用できるのはもちろん、語り手と聞き手のあいだに翻訳者やマスメディアなど多量の媒介が入る場面に広く適用できる。また、当事者の体験の世代間コミュニケーションにも使うことができる。菅野・北上田・実川・伊藤・やまだ（2009）では、沖縄の戦争体験や水俣病の体験など、過去の出来事を語り継ぐ伝承活動において、「むすび」の役割をする媒介者の働きの重要性が浮かび上がった。語り継ぎは、誰かが誰かに何かを伝達するとい



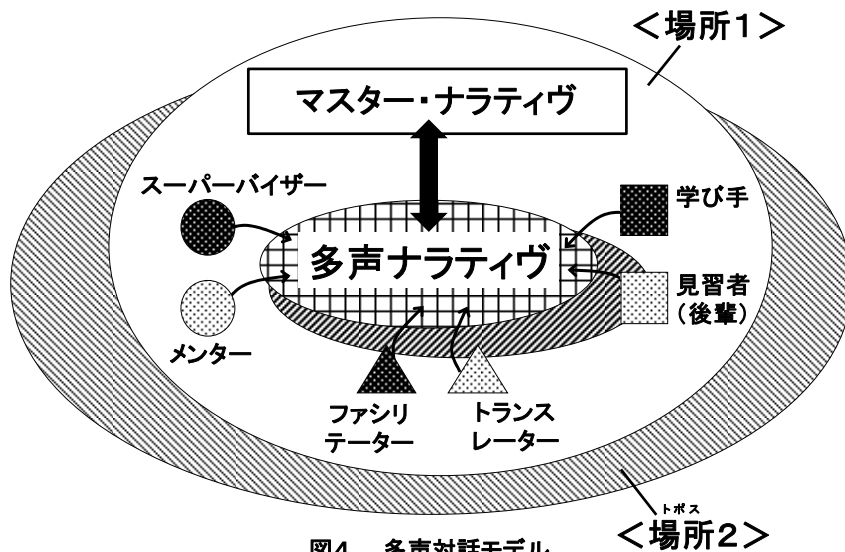


図4 多声対話モデル  
差異化し多重化するナラティヴ<sup>トボス</sup>場所

う通信モデルではうまくいかない。語り手が昔の記憶をモノのように聞き手に受け渡すことは不可能である。媒介者が聞き手と共に自分の問題として想像したり考えたりできるように協働の語り場をつくる必要がある。

当事者と聞き手の二者モデルでは「やりとりの相互行為」が中心だが、三者モデルでは「協働のナラティヴ場所」が生成され、その場所自体がナラティヴを生み出す力をもつ。このように、三者モデルでは二者モデルとは根本的な変化がおこる。やまだ(1987)は、二項関係から三項関係の変化として、①対人関係と対物関係の結合、②語り合いの形式づくり、③媒介項を含む三項の関係性、④文脈からの離脱化と距離化をあげた。二者モデルでは、ローカルな場所で二者だけに通じる共感や特殊語でもコミュニケーション可能である。三者モデルでは、媒介項を介在させて特定の場所や固有の文脈からはなれてインターローカルにしていく作業、あるいは私的なものをパブリック(公共、共有)場所に開いていく作業が必要になる。やがて、語りの形式や技術や文化をメディア(媒介)として蓄えた協働のナラティヴ場所<sup>トボス</sup>が、語り手や聞き手に働きかけてナラティヴ生成に力をもつようになるだろう。メールが恋文を変え、私的日記がブログに変わり、携帯電話が新小説を生み出しているように、メディアはナ

ラティヴの様式と公共化の仕方を根本的に変化させると考えられる。

#### 4 多声対話モデル—差異化し多重化するナラティヴ<sup>トボス</sup>場所

図4は、本論で新しく提示する多声対話モデルである。図3の「協働の学びモデル」の発展形と考えると、「協働の学びの多声モデル」と呼ぶこともできるだろう。このモデルでは、多くの人々の声の差異化によるナラティヴ場所<sup>トボス</sup>の分裂や重層化や異化が起こることが強調されている。

「多声」とは、複数の声マルチ・ボイスではなく、ポリフォニック・ボイスを意味する。つまり、単に数が多数に増えるということではなく、バフチン(Bakhtin, 1988, 1995/1963)が理論化したように、異質なものに分裂した多様な声<sup>トボス</sup>がひびくことである。ひとつのことが2つの相反する意味を帯びる声<sup>トボス</sup>をもち、同じことばを語ったとしても、多義の意味による対立や逆転や異化が行われていくような生成的な多声である(やまだ, 2008a)。

ナラティヴ場所<sup>トボス</sup>に多くの異質な人々がかかると、それぞれの立場の差異性も複雑になり、ナラティヴの

意味も語られる時間にもズレが生じて重層化してくる。同じことばが語られても、少しずつ異なるトーンで語られ、相互に矛盾をおびてズレや対立が生じてくる。たとえば、女声か男声かというような自己と他者の分裂だけではなく、女の声もソプラノとアルトでは異なる旋律とひびきをもち、男の声もバスとテナーでは異なる音色をもち、他者の声と複雑にむすびつく。ボーイ・ソプラノのように、あるときには男声女声を超え、「男声」というカテゴリーを裏切ったりする。

多声的対話をモデル化すると、図4のようにナラティブ場所は、話題的にも意味的にも時間的にもズレや分裂を起こして重層化していくであろう。

デリダ (Derrida, 2000/1972) は、ことばは「あてにならない郵便制度」のように空間的・時間的にズレと差異化をはらんで変容していくことを理論化した。彼は、差異 (difference) と区別して、特に時間的ズレを含む運動を差延 (différance=英語では difference と表記される) と呼んだ。差延は、「延期する」時間的待機と、「異なる」空間的隔たりを共に含み、時間が空間へ、空間が時間へと相互に位置ズラシ (displacement) を起こしていく変形活動である (やまだ, 2008a)。

多声的対話モデルでは、成員が位置する場所も、その成員が多声的対話で協働して生成するナラティブ場所も、差異化され差延化される。したがって、位置や時間のズレを生成しつつける重層化した場所としてモデル化できる。

このモデルは、図4に示したように、同じ役割をもつ成員が、さらにパート (part) に分かれてズレのある役目を担う場合に効果的に適用できる。たとえば、教え手は、「スーパーバイザー (supervisor=上に立って見る人=管理的指導者)」と「メンター (mentor=庇護的助言者)」に分かれる。親が「父親」と「母親」に分かれる例をあげてもよいかもしれない。

媒介者は、「ファシリテーター (facilitator=促進的援助者)」と「トランスレーター (translator=中継的翻訳者)」に分かれる。媒介者が媒介する人間と媒体 (メディア) に分かれる例をあげてもいいかもしれない。

学び手は、学び手の当事者や先輩と、彼らを見ながらまねて学ぶ見習者 (後輩) や新参者などに分かれる。

これらのパートの分裂は、同じ出来事に対して、少

ずつズレをもつナラティブを生むことになるので、協働の学びの場では、相補的に働くとともに、異なる意見をつくりだして、視点の変換を生んでいく生成的効果をもつ。

さらに図4では、多声ナラティブ場所は、複雑な声が縦横に飛び交う異種混交の場所になると共に、それらとの相互作用のなかで、より大きな統括的物語「マスター・ナラティブ」も、生み出されることを表している。多声と多文化が競合して闘いのアリーナが繰り広げられる場所では、それを統括するための強大な指揮者や統括する物語が必要になる。

一般には多声的ナラティブ場所では多様な声生まれるので、少数者の声が大切にされると考えられてきた。しかし、ドストエフスキーやバフチンなど多声的対話を生むロシアの風土を考えてみても、多声的ナラティブ場所は、逆説的にマスター・ナラティブも生成されやすい土壌ではないだろうか。そうだとしたら、大変興味深いモデルになるだろう。

もちろん、マスター・ナラティブは、今まで記述してきたどのモデルでも生まれる可能性がある。ただし、少人数のモノローグの音楽や室内協奏曲では、ズレが起こってもそのまま放置したり、ズレを補正するように互いの呼吸を合わせたり、ズレにそってますますズレを大きくして変奏していくなど相互調整が比較的容易であろう。したがって、楽譜のようなルールや、マスターとしての指揮者がいなくても調整できる。

しかし、多数の成員をもち、役割もパートも多声化したポリフォニー音楽やポリフォニー演劇では、人々の多様な声を統合するためのルール (rule=規則, 約束事) やフォーム (form=形式, 様式) が必要になるから、マスター・ナラティブが生み出されやすくなる。

マスター・ナラティブの語り手として、多声的ナラティブ場所を統括するマスター (master=熟達者, 支配者, 統制者, 親方) の存在も必要になるだろう。マスターを別の名前にすれば、コンダクター (conductor=指揮者, 案内人, 管理者) やディレクター (director=指導者, 指揮官, 演出家) などである。

多声的で、異種混交的で、多種の葛藤をはらむ、人種のるつぼのような多声的場所では、ナラティブ場所のズレや分裂や異化が起きやすくなる。そこで、多声的ナラティブが活発になると、それを統括するための

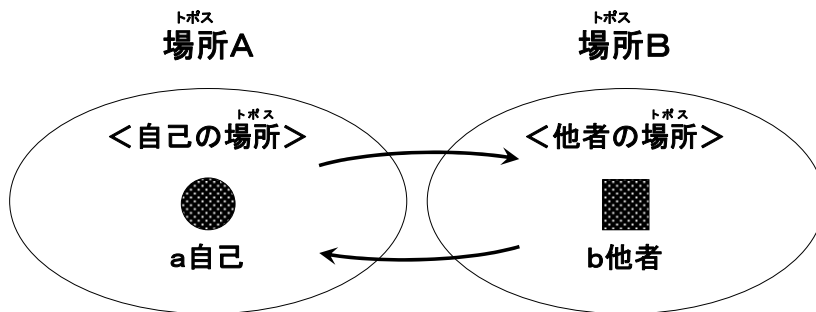


図5 差異ある<sup>トボス</sup>場所の対話モデル

自己<sup>トボス</sup>の場所と他者<sup>トボス</sup>の場所の往来

※ 専門家と生活者の<sup>トボス</sup>場所の例

「a自己」→「専門家」<sup>トボス</sup>  
「場所A」→「専門家の場所」(研究、教育、医療など)

「b他者」→「生活者」<sup>トボス</sup>  
「場所B」→「生活者の場所」(家庭、地域など)

マスター・ナラティブもまた、生成されやすくなるのではないだろうか。アメリカ、ロシア、中国のような、多矛盾と多民族をかかえ多声<sup>トボス</sup>が飛び交う巨大国で、強力なリーダーやマスター・ナラティブが生まれやすいのは、このような理由かも知れない。

なおマスター・ナラティブは、質的研究では支配的な物語としてネガティブにとらえられる傾向があるが、それ自体は価値中立的にとらえるべきで、良くも悪くも機能すると考えられる。

## 第2部 「異場所と異時間」の対話モデル

### 5 異場所<sup>トボス</sup>の対話モデルー自己<sup>トボス</sup>の場所と他者<sup>トボス</sup>の場所の往来

第1部では、自他の場所<sup>トボス</sup>の差異がそれほど大きくない場合をモデル化してきた。第2部では、場所<sup>トボス</sup>の差異と隔たりが大きく、別の場所として扱う場合のモデルを示している。

図5は、「2つの場所の往来と対話」モデル（やまだ・山田、2006）を再構成したものである。自己

(a) が位置する場所Aと、他者 (b) が位置する場所Bは差異と隔たりがあり、対話は、2つの場所<sup>トボス</sup>を往来する移動行為によって表現される。図2の二者対話モデルと比較すると、図5は自己と他者は位置が離れているだけではなく、それぞれの所属する場所<sup>トボス</sup>が離れていると考えるほうが適切な場合のモデルである。図2のように同じ場所<sup>トボス</sup>で対話するモデルか、図5のように場所自体が異なるモデルになるかは、研究目的や視点の置き方によって変わりうる。

第2部においても、三者対話モデルや多声対話モデルのように、三場所往来モデルや、多場所往来モデルがありうる。しかし、あまりに複雑になりすぎるので、本論では場所の数が2つの場合のみ図示することにした。ここでは基本形として2つの場所の対話往来モデルとそのヴァリエーションのみを図式化している。

図5の基本モデルは、異文化コミュニケーション、都会と田舎など異なる価値をもつ2つの現場の交流、経験の場所を異にする老人と若者の交流など、さまざまな場合に適用できるだろう。自己と他者は、異なる人間でなくても、同じ人間が2つの場所<sup>トボス</sup>を行き来する場合としても考えることができる。たとえば、日本語と英語のバイリンガルの人であれば、日本語ナラティブの場所Aと英語ナラティブの場所B<sup>トボス</sup>を往来しながら語っていると考えることができる。

また仕事と家庭を両立している人であれば、職場と家庭という2つの場所<sup>トポス</sup>を行き来していると考えられる。図5のモデルは、同じ人間が異なる場所を往来するモデルとして、場所と位置が変われば、他者になるかのように機能が変わる場合に有効だろう。たとえば、会社で部下に解雇を言い渡す社長の自己と、家庭で娘におこづかいを渡す自己は、「冷酷な会社人間」から「やさしい父親」のように異なる人間に変化する可能性がある。「昨日の私は今日の他人」のように、自己が他者になる場合も、「明日は我が身」のように、他者が自己になる場合もあるだろう。

本論では、もとのモデルの例にしたがって、「専門家の場所<sup>トポス</sup>」と、「生活者の場所<sup>トポス</sup>」という2つの場所の場合を考えてみよう。専門家は、研究者、教育者、医療者（医師、看護師）などが所属する場所<sup>トポス</sup>、大学、学校、病院などの場所<sup>トポス</sup>に居て、そこからものを見たり考えたりしている。生活者は、家庭や地域など生活の場所<sup>トポス</sup>に居て、そこからものを見たり考えたりしている。

今までは、場所<sup>トポス</sup>的発想がうすく、個人モデルで考えられてきたから、語りがどこで行われるかには、あまり注意が払われてこなかった。しかし、たとえば患者が「病院」という専門家の場所へ診察に行き医師と話をすると、医師が在宅患者に往診して「家庭」という生活者の場所で話をする場合とでは、ナラティブが大きく変わるはずである。

他の例では、たとえば学校の先生が「学校」という場所だけで生徒を見るとときと、家庭訪問に行き「家庭」という場所で生徒を見るとときとでは、見方が変わっているはずである。大学の教室で通常の授業を3年するよりも、合宿で同じ場所<sup>トポス</sup>に3日寝泊まりする方が、学生との関係性や対話の質の変容が大きいと実感することもある。

人と人のあいだだけではなく、場所<sup>トポス</sup>のなかで対話が行われ、場所<sup>トポス</sup>と場所<sup>トポス</sup>とのあいだでも対話が行われるのである。

従来の考え方では、それぞれの人が属している場所<sup>トポス</sup>の相違や差延を自覚していない場合が多かった。同じ人間でも、「個」として見るのではなく、どこの場所<sup>トポス</sup>に居て何を背景に語っているかということに、もっと注目すべきだろう。

## 6 人生の年輪モデル—自己と他者の人生時間をつつむ多重の場所<sup>トポス</sup>

図 6-1, 図 6-2 は、「ライフストーリーの樹モデル」（やまだ・山田, 2006）をもとに、「人生の年輪モデル（Life Rings Model）」に名称を変えた。モデルの基本イメージは同じであるが、「切り株モデル」「ライフストーリーの樹モデル」から、3度目の名称変更である。

モデルのネーミングは重要で、そのモデルの普及と寿命にかかわる。「切り株モデル」という呼び名は、説明抜きでイメージを端的に伝える上で効果的である。しかし、「切り株」が死んだ木を連想させることが問題で、木は生きていることが必須と考えられた。

そこでライフの樹とライフストーリーを重ねて、「ライフストーリーの樹モデル」に変えた。人は、周囲の人々を含む生態・文化・社会的場所と、その人が生きるプロセスで長い時間をかけて紡いできた「ライフストーリー」によって生きている。ライフストーリーは、外からは見えないが地面から「いのち」の水や栄養をすいあげて、人（person）を成り立たせるコア（核心）をかたちづくり、成長させていく中心的機能を担っている。人の居場所である幾重もの時空間（クロノ・トポス）の中軸に、その人の人生の織物というべき、生きたライフストーリーが、みずみずしく紡がれつつけている。そのライフストーリーは、その場所や人々との関係性のなかで、種々のヴァージョンの物語として語られながら、さらに育まれていくというイメージである。これは、多くの文化で古代から伝わる文化表象としての「生命の樹」イメージと重ねる上で良い名前である。しかし、肝心の「入れ子」の場所イメージがうすれてしまった。そこで再び名称を変更したのである。

「人生の年輪モデル」は、時間軸を含む重層化した複数の場所<sup>トポス</sup>を人生の年輪のかたちで示したものである。年輪は、入れ子が重層的に重なった環状構造をもつが、それぞれの人が幾層にもつつまれた場所<sup>トポス</sup>のなかに居ること、それぞれの人の居場所が異なっていること、それぞれの場所が人生時間によって形づくられていることを表している。

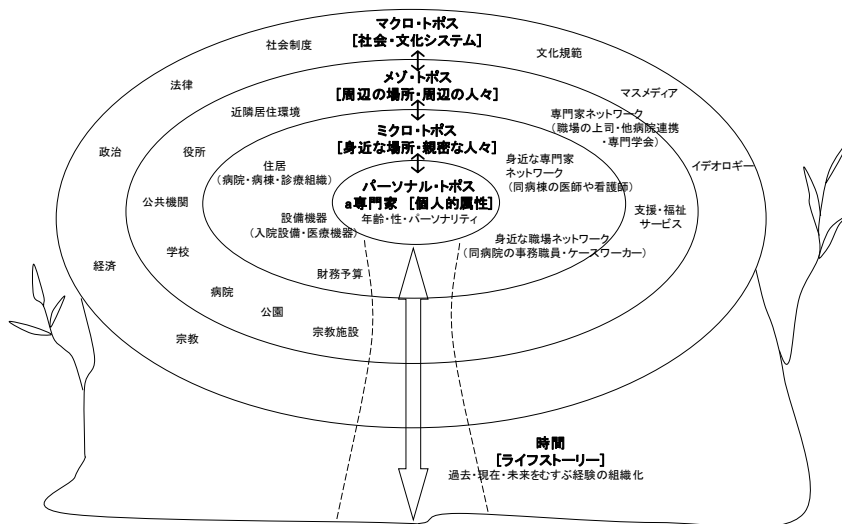


図6-1 人生の年輪モデル  
自己と他者の人生時間をつむぐ多重の場所<sup>トボス</sup> (自己の場所: 専門家の場合)

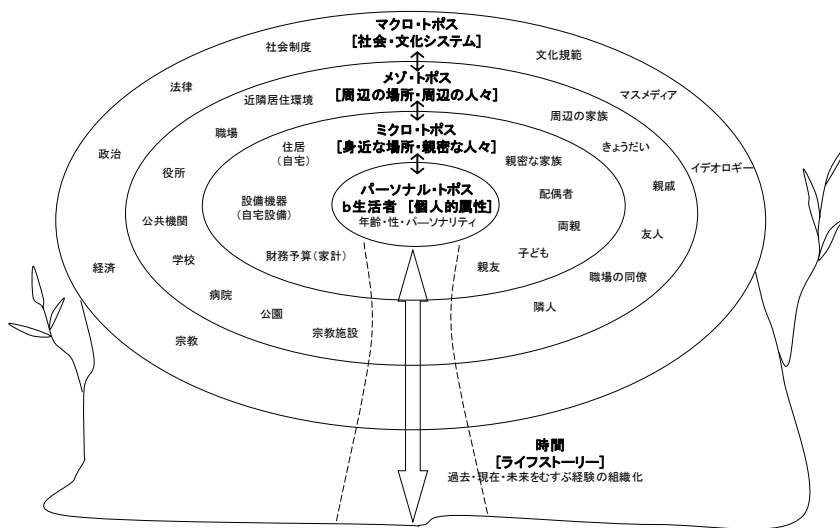


図6-2 人生の年輪モデル  
自己と他者の人生時間をつむぐ多重の場所<sup>トボス</sup> (他者の場所: 生活者の場合)

「人生の年輪モデル」は、やまだ (1988) の「入れ子モデル」をベースにして、2つの場所の移行 (うつり) と交流 (むすび) によってモデル化された。それに加えて、次の2つのモデルから、重要と考えられる基本要素をとりだして統合した。

ひとつは、Bronfenbrenner (Bronfenbrenner, 1996/1981) の生態学的モデルである。彼は、人を取りまくエコロジカル・システムとして、マイクロ、メソ、マクロの3つのシステムを考えた。もうひとつは、Kahn & Antonucci (Kahn & Antonucci, 1980) の

コンボイ・モデルである。システムは「学校」「職場」「社会制度」など制度や組織としての体系であるが、コンボイ (convoy, 護送船団) は、長期にわたって共に歩み、人を見守る親密な人間関係、社会的ネットワークである。

人生の年輪モデルでは、場所概念のなかに、生態学的システムと社会的ネットワークの両方の概念を統合し、特にライフ (人生, いのち, 生活) を生き、それを当事者がライフストーリーとして有機的にオーガナイズした「時間」を中核にすえていることが、大きな特徴である。ライフストーリーとして編集された時間は、その人の自己を物語的アイデンティティとしてかたちづくる。ナラティブ論では、自己アイデンティティという概念は、「個人」を中核にしたものではなく、物語的アイデンティティとして根本的に変革されるからである (やまだ, 2006)。他者も同様に他者の人生物語をもって生きているので、お互いの居場所は、ときに図 6-1 と図 6-2 のように異なっている。

図 6-1 は、専門家の居場所を示している。専門家をとりまくコアの部分には、パーソナル・トポスがあり、ここには年齢や性やパーソナリティなど個人的属性が入る。マイクロ・トポスにある密接な人やものとの関係性のなかで、専門家も自分自身のライフストーリーを生きている。

マイクロ・トポスには、専門家を支える親密な人々からなる社会的ネットワークや身近な生態学的環境などが入る。前者としては、たとえば同病院の同診療科で共同の仕事をする医師や看護師など身近な専門家のネットワークや、同病院で直接仕事を補佐する薬剤師や事務職員やケース・ワーカーなどの職場ネットワークなどがあげられる。また後者の病院環境としては、病院の人員配置や病棟設備や診療組織や財務予算などがあげられる。メゾ・トポスには、間接的に影響を与える病院長など職場の上司や連携する他の専門家ネットワーク、近隣環境や支援福祉サービスなどがあるだろう。マクロ・トポスでは、より大きい社会制度や文化規範やマスメディアなどが影響を与えている。

これら多重の場所は、空間的広がりとしての社会・文化的ネットワークでむすばれているが、パーソナル、マイクロ、メゾ、マクロいずれの層も、時間的深さによって形成されている。パーソナルに語られるライフス

トーリーは、人生時間をむすぶ経験の組織化であり、個人のパーソナルなコアを形づくる。このライフストーリーはパーソナルなものであっても、その人をとりまく親密な人々との関係性のなかで語られる。また、人をとりまく幾重もの社会・文化・歴史的な文脈をもつ多重の場所に埋め込まれているので、より大きな文化・社会・歴史的ストーリーと連動している。

図 6-2 は、生活者の居場所を示している。生活者も、マイクロ・トポスにある密接な人々やものとの関係性のなかで、自分自身のライフストーリーを生きている。場所の構造は、図 6-1 の専門家のもと同じであるが、その具体的な内容は異なる。たとえば、その人にとって重要で親密な人や場所を示すマイクロ・トポスには、親や子どもなど親密な家族や、親しい友人、自宅の住居や設備、家計などが入る。

専門家は、ニュートラルで抽象的な「個人」ではなく、生活者とは別の場所にいる別の人間である。専門家が生活者と対話するときは、専門家は自分自身の場所で、自身のライフストーリーをコアにもちながら、他の場所に居る他者と対話し、他者のライフストーリーを聞き、解釈し、判断しているのである。このようなモデルによって、専門家も、自分自身がおかれた場所の制約や状況的文脈のバイアスを受けており、特権的な立場にはいられないことがわかる。また、同じ専門家と患者の組み合わせでも、専門家の場所である病院で話を聞くか、生活者の居場所へ訪問看護して家庭で話を聞くかでは、語り引き出される場所の構造が異なっていることがわかる。

なお「人生の年輪モデル」は、今まで提出した図 1-図 5 のモデルとは、モデルの具象化レベルが異なることに注意されたい。今までのモデルは、単純で抽象的で理論的な「基本枠組モデル」であった。図 6 の 2 つのモデルは、基本枠組である図 5 を現実の研究テーマに即して具体化した「半具象モデル」であり、「基本構図モデル」とも呼ぶ中間水準のモデルである (やまだ, 2002)。現実の研究では、この水準の「半具象モデル」がもっとも重要で、現場の特徴に合致した領域密着モデルになる。

「基本枠組モデル」は、理論からトップダウン、あるいは他のモデルとの関連からメタ的に、あるいは現場データからボトム・アップに生成されたモデルの抽

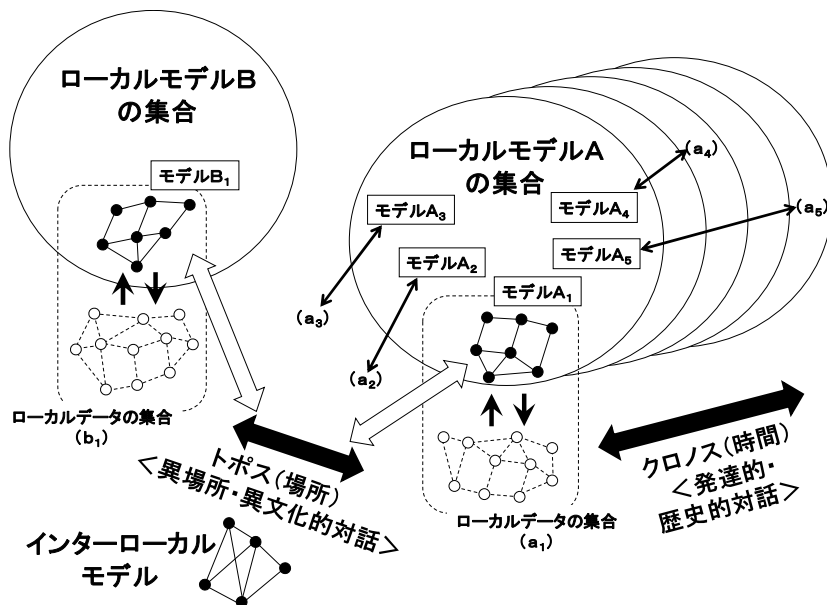


図7 クロノトポス・モデル  
異場所と異時間<sup>トポス</sup>の対話モデル

象度をあげて洗練を重ねてつくられる。いわば、蒸留しつくして透明で純粋なスピリットだけになったようなモデルであるから、味も香りもないが、あらゆる製品に加工可能である。

逆に「現場具象モデル」は、現場データから引き出される。現場データは、味も香りも現場臭が濃厚で、美味しいもの、特異なもの、発酵不良で腐敗しかけたものなども交じった、雑多な混合物の集積である。そこからボトム・アップで「基本要素モデル」「事例モデル」など、現場密着で具体的な「現場具象モデル」が生成される。

「半具象モデル」は、「基本枠組モデル」と「現場具象モデル」を対話させて生成される、必要十分な具象性と現実性を盛り込んだ中間水準のモデルである。

本論では、おもに基本枠組レベル間の多様性を提示し、それらの相互関係を比較考察している。しかし、今までのどのモデルも研究目的に合わせてより具象化した「半具象モデル」を生成することが可能である。たとえば図2は、もとはより複雑な文脈を入れた「半具象モデル」であった(やまだ, 2000)。また、図3

を、ゼミ実習授業の形態にあわせて加工した「半具象モデル」の例もある(やまだ, 2007)。

ここでは煩雑になるので提示しなかった例を含めて、研究目的や現場にあわせて多種のヴァリエーションを生成することが可能である。本論では基本枠組レベルで多様なモデルを提示しているが、実際には、レベルの差によっても多様な変異形が生成されるわけである。

## 7 クロノトポス・モデル—異場所と異時間<sup>トポス</sup>の対話モデル

図7のクロノトポス・モデルは、異場所と異時間の対話をモデル化したものである。これは「多文化対話」と「歴史・時間的対話」の両方を組み込んだ新しいモデルである。クロノトポス・モデルは、今まで説明してきた各種モデルを統合し、それを「対話的モデル生成の方法論」として統合して説明するメタ・モデルの位置にある。

このモデルは、もとは「この世とあの世のイメージ面の日仏比較」研究(Yamada & Kato, 2004)のために

生成された。さらに「この世とあの世の現代のイメージ画と歴史的画像との比較」の方法論に拡張され、数度の改訂と名称変更と一般化を経て、理論モデル化したものである。

クロノトポス・モデルは、ローカルモデル生成プロセスと、インターローカルモデル生成プロセスを多段階で統合的に説明する対話的モデル生成法の方法論を示す図式である。

図7によって、まずローカルモデル生成プロセスを説明しよう。ローカルモデル A<sub>1</sub> は、特定の場所で抽出されたローカルデータの集合 (a<sub>1</sub>) との対話 (相互矢印) によって生成される。モデルが網目で描かれているのは、論理構築モデルではなく、柔軟な網目<sup>ネットワーク</sup>モデルを想定しているからである。小さい単位の網目は、事例モデルになるが、モデル相互間の関係性 (むすび方) が重要である。場所によってネットワークの結ばれ方も変われば、その空間配置の位置も密度も異なるだろうと考えられる。

ローカルモデル A<sub>1</sub> と同様の手続きで、ローカルモデル A<sub>2</sub>, A<sub>3</sub> などが生成される。これらは、ローカルモデル A の集合になる。

たとえば、この世とあの世のイメージ日仏比較研究では、日本人のイメージ画データから得られた A<sub>1</sub> 「あの世の位置 (日本イメージ画)」モデル, A<sub>2</sub> 「たましいの形 (日本イメージ画)」モデル, A<sub>3</sub> 「たましいの移行 (日本イメージ画)」モデルなど、この研究で生成した関連する多様なモデル (やまだ, 2002) を集めたものがローカルモデル A の集合になる。

ローカルモデル A の集合に、クロノス (時間) 的対話によって、現在とは異なる時間に抽出されたローカルデータの集合 (a<sub>4</sub>, a<sub>5</sub>) との対話から生成したモデル A<sub>4</sub>, A<sub>5</sub> などを加えることができる。異時間には、「昨日」「1年前」「青年時代」「江戸時代」など多様な時間スパンがありえる。時間変化をプロセスとしてとらえる生涯発達の研究や歴史変化的研究の場合には、クロノスの設定が多段階で複雑になる。ただし、過去のデータを扱っていても、モデル生成は現在の地点で行われるので、モデル A<sub>4</sub>, A<sub>5</sub> なども、現在のローカルモデル A の集合に入れられる。

たとえば、日本の 16 - 19 世紀歴史画像資料をデータにして、A<sub>4</sub> 「あの世の位置 (日本歴史画像)」A<sub>5</sub>

「たましいの形 (日本歴史画像)」をローカルモデルにすることが考えられる。「たましいの形」をより細分化して「幽霊の形」の歴史の変遷を追ってモデル化してもよいだろう。

図7では、煩雑になるので描かれていないが、ローカルモデル A の集合内において、ローカルモデルを相互に対話させてインターローカルモデルを生成することが可能である。

たとえば、A<sub>1</sub> 「あの世の位置 (日本イメージ画)」モデル, A<sub>2</sub> 「たましいの形 (日本イメージ画)」モデル, A<sub>3</sub> 「たましいの移行 (日本イメージ画)」モデルを統合して、さらに一般化したモデルを生成することができる。あるいは、現代日本人が描いた A<sub>2</sub> 「たましいの形 (日本イメージ画)」モデルと、日本の歴史画像に描かれた A<sub>5</sub> 「たましいの形 (日本歴史画像)」を対話させてインターローカルモデルにすることができる。

図7に描いたように、インターローカルモデルは、異場所、異文化間対話によっても生成される。

ローカルモデル A の集合と同様に、別の場所で抽出したデータからローカルモデル B の集合ができる。ローカルモデル間の対話によって、異なる場所に共通し一般化するインターローカルモデルが生成できる。

先の例では、A<sub>1</sub> 「あの世の位置 (日本イメージ画)」モデルと、B<sub>1</sub> 「あの世の位置 (仏イメージ画)」モデルの対話によって、より共通性が高く一般的な「あの世の位置イメージ」のインターローカルモデルが生成できる。

図7では、2場所の対話しか描かれていないが、同様に多場所の対話も可能である。ただし、対話の基礎は2つ (di-) に分けられるところにあるので、2つの場所の対話が基本になるだろう。大きな差異のある2つの場所を選んでモデル化し、その後で、そのモデルに他の場所を加えて改訂していくなどの方法がとられる。

先の研究例では、日本とフランスのデータを徹底的に読み込んで、その2場所を基礎にローカルモデルとインターローカルモデルを生成した。そのあとで、イギリス、ベトナムのデータを加えて多文化比較を行った。

なお図7では、2つの場所 A, B が模式的に立体として描かれている。本来は2つの場所はこの図のよう



に独立ではなく相互作用しているの、実際にはもっと複雑な関係になるが、モデルでは単純化して独立的に描かれている。

1つの場所のうちには、横断面として社会文化的コンテキスト、縦断面として時間軸によって変容する歴史的文脈がある。クロノトボス・モデルは、両方の文脈を考慮に入れることができるモデルである。

また、従来の比較文化研究では、個々の文化は独立であるとみなして比較されてきた。それに対して、対話的モデル生成法では、文化や場所には、もともと相互作用があり、オーバーラップがあることを前提にして、それらを相互に重ね合わせて共通化や一般化を行うことによって共通化を見出そうとするのである。

クロノトボス・モデルは、現在のところ、もっとも統合的なモデルであるが、本論で提示された多様なモデルがすべて集約できるというわけではない。あらゆる場合に通用するかわりに網羅的になりすぎる巨大普遍モデルではなく、研究目的に合わせて、現場の特徴と領域固有性を生かした多種のローカルモデルが必要である。モデルの水準はさまざまで、種々のものができる。それら多種のローカルモデルをどのように対話させ、関係づけていくか、インターローカリティを生み出していく方法論を提示しているところに、クロノトボス・モデルの新しい意味がある。

## 引用文献

- オールポート, G. W. (1970). 心理学における個人的記録の利用法 (大場安則, 訳). 東京: 培風館.
- (Allport, G. W. (1942). *The use of personal documents in psychological science: Prepared for the Committee on Appraisal of Research*. New York: Social Science Research Council.)
- バフチン, M. M. (1988). ことば 対話 テキスト (新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛, 訳). 東京: 新時代社.
- バフチン, M. M. (1995/1963). ドストエフスキーの詩学 (望月哲男・鈴木淳一, 訳). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- ブロンフェンブレンナー, U. (1996). 人間発達の生態学 (エコロジー) ——発達心理学への挑戦 (磯貝芳郎・福富謙, 訳). 東京: 川島書店. (Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- デンジン, N.K. & リンカン, Y.S. (2006). 質的研究ハンドブック (平山満義, 監訳). 京都: 北大路書房.
- (Denzin, N., & Lincoln, Y. (Eds.). (2003). *Strategies of qualitative inquiry. Handbook of qualitative research paperback edition vol.2 (2nd.ed.)* Thousand Oaks, Calif.: Sage Publications.)
- デリダ, J. (2000). ポジション 新装版 (高橋允昭, 訳). 東京: 青土社. (Derrida, J. (1972). *Positions*. Paris: Galilee. Paris: Les Editions de Minuit.)
- フリック, U. (2002). 質的研究入門——「人間の科学」のための方法論 (小田博志他, 訳). 東京: 春秋社.
- (Flick, U. (1995). *An introduction to qualitative research: Qualitative forschung*. Reinbek: Rowohlt Taschenbuch Verlag.)
- ギアーツ, C. (1991). ローカル・ノレッジ——解釈人類学論集 (梶原景昭他, 訳). 東京: 岩波書店. (Geertz, C. (1983). *Local knowledge: Further essays in interpretive anthropology*. New York: Basic Books.)
- ギブソン, J. J. (1985). 生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る (古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻, 訳). 東京: サイエンス社. (Gibson, J. J. (1979). *The ecological approach to visual perception*. Houghton Mifflin.)
- グレイザー, G. B. & ストラウス, A. L. (1996). データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか (後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳). 東京: 新曜社. (Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine.)
- 濱口恵俊 (編). (1993). 日本型モデルとは何か——国際化時代におけるメリットとデメリット. 東京: 新曜社.
- Kahn, R. L., & Antronicci, T. C. (1980). Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. *Life-span development and behavior*. Vol. 3. New York: Academic Press.
- 木村敏. (1988). あいだ. 東京: 弘文堂.
- クリステヴァ, J. (1999). ポリローグ (足立和浩・沢崎浩平・西川直子・赤羽研三・北山研二・佐々木滋子・高橋純, 訳). 東京: 白水社. (Kristeva, J. (1977). *Polylogue*. Paris: Éditions du Seuil.)
- 見田宗介. (1965). 現代日本の精神構造. 東京: 弘文堂.
- 中村雄二郎. (1989). 場所 (トボス). 東京: 弘文堂.
- 菅野幸恵・北上田源・実川悠太・伊藤哲司・やまだようこ. (2009). 過去の出来事を“語り継ぐ”ということ. 質的心理学研究, 8, 6-24
- ホワイトヘッド, A. N. (1981). 科学と近代世界 (上田泰

- 治・村上至孝, 訳). 京都: 松籟社. (Whitehead, A. N. (1925). *Science and the modern world: Lowell Lectures*. New York: Macmillan.)
- やまだようこ. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51.  
(やまだようこ (編). (1997). 現場心理学の発想 (pp.161-186). 東京: 新曜社.)
- やまだようこ. (1987). ことばの前のことば——ことばが生まれるすじみち 1. 東京: 新曜社.
- やまだようこ. (1988). 私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理. 東京: 有斐閣.
- やまだようこ (編). (2000). 人生を物語る——生成のライフストーリー. 京都: ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス——「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- Yamada, Y., & Kato, Y. (2004). Japanese students' depictions of the soul after death: Towards a psychological model of cultural representations. In S. Formanek, & W. Lafleur (Eds.), *Practicing the after life: Perspectives from Japan* (pp.417-438). Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- やまだようこ. (2006). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己. 心理学評論, 49, 436-463.
- やまだようこ・山田千積. (2006). 「ライフストーリーの樹」モデル——専門家と生活者の場所と糖尿病のナラティブ. 看護研究, 39, 385-397.
- やまだようこ (編). (2007). 質的心理学の方法——語りをきく. 東京: 新曜社.
- やまだようこ. (2008a). 多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル——「対話的モデル生成法」の理論的基礎. 質的心理学研究, 7, 21-42.
- やまだようこ. (2008b). 喪失を生きるナラティブ——千の風になって. やまだようこ (編). 人生と病いの語り. 東京: 東京大学出版会.

(2008.1.8 受稿, 2008.10.7 受理)